
宝石の翼

璃慧紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝石の翼

【Nコード】

N05180

【作者名】

璃慧紗

【あらすじ】

人の魂から生まれた存在、それはく魂の宝石ージュエルネスー。人と魂から繋がりが合っているからこそ、半身と呼ばれる者たち。

これは一組の人と半身の一生の中の一欠けら。

後に、く最も美しき魂を持つ王く、く永久に輝く宝石の王妃くと歴史に名を刻まれる者達の物語。

世界観（前書き）

はじめまして。璃慧紗りえさと申します。
今回は世界観です。

世界観

世界観

世界には人とその魂を分けた半身が暮らしていた。一半身＜魂の宝石ージュエルネスー＞は人の魂から生まれ、一生を共にした。

人は半身に一魂の音楽＜魂音ーストーンリンクー＞を与え、半身はそれによって得た力で人を守っていた。魂音は楽器を使い奏でる。半身はその人の力を表している存在でもあり、力が強いと半身の数は多い。しかし、人の魂の力が桁違いに大きい場合、魂がうまく分けられずに一人だけの場合がある。人の魂の力⇨半身の力と言ってもおかしくは無く、それほどまでに人と半身の結ぶつきは大きい。しかし、そのことを利用して、ジュエルネスを攫い悪用する者達もいる。それらを捕まえるのが王族の役目でもある。

世界に存在するのはひとつの大きな大陸。その大陸の3分の一を占めるのがフェザーリンク王国。

フェザーリンク王家が代々王を務めている。今の王は第17代目。主人公達はこの王国で生活している。

残りの半分を占めるのがアースティア帝国。元はアースティア王国だったが、先代の王に子がいなかったため、宰相が王を務めている。尚、宰相の代になってから、近くの小国を吸収し、帝国となった。今の帝は帝国となってからは第3代目。

もう半分は未開拓の地。そのほとんどが山で、人は殆ど住んでいない。いるとしても、悪に手をそめた者が多い。王国・帝国の人々はめったに近づかない。

世界観（後書き）

作品の批評、お待ちしております。

誤字・脱字がありましたら、お知らせ願えると嬉しく思います。

人物紹介（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

今回は人物紹介です。

注意..今回はネタバレがあります。

人物紹介

人物紹介

「」の中はその人物の二つ名です。

主人公

イクト・ロイアスキ・フェザーリンク 「真の響きをもつ宝主」
テイマー

リンクストーン王国第二王子。美青年。鮮やかな金髪、空色の瞳。小説開始時17歳↓18歳。あまり表情を出さない。けれども、無関心のように見えて、正義感が強い。

町に行くことが多い。町での偽名はロキ。城でも街でも見た目だけでなく、その性格や物腰からかなりの人気がある。誰も彼の正体を知らない。（公式の場ではほとんど姿を見せないため）

自らの半身であるスノーを何よりの愛し、それはスノーが体調を崩したときは王の誕生日のパーティーをキャンセルしたほどである。成人の儀（18歳）を迎えればスノーとの結婚を考えている。結婚までの過程でひと悶着あったのだが、結果的に結婚した。後に現王が退くとフェザーリンク国王となった。

＜心楽器＞はフルート。また、自分の声で半身に力を与えられるイクテイア＜天の声＞保持者のため口数が少ない（声を出しただけで力を与えてしまうため）。首に自己開発のチョーカーを巻き、声をだしてしまったときに＜天の声＞が発動しないようにしている。

また、彼は王族なので、＜魂の宝石＞を盗む「宝石殺し」を捕らえる仕事をしている。

スノーアクア・クリステル（後にフェザーリンク姓になる）

「水晶に輝く雪結晶の女神の石」
ネスファ

イクトの半身。イクトの力がかなり強いため、スノー1人。＜魂の宝石＞で象徴はアクアマリン。美女。銀髪、海色の瞳。小説開始時17歳↓18歳。動物形態では白銀カラス。常に笑顔で優しい。けれども怒ると怖い。

イクトを誰よりの愛している。成人の儀の後、事件に巻き込まれたりするが、結果的にイクトと結婚する。第二王子妃となる。イクトが国王になったのと同時に彼女は王妃になった。

人物紹介（後書き）

あとからだんだんと補足していききたいと思います。

1話：王族の朝食（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

1話：王族の朝食

フェザーリンク王国の大広間。長いテーブルにはハムやベーコン、スクランブルエッグ、青々しい葉の大きなボウルに入ったサラダなどの朝食にふさわしい食事が並べられていた。

そして、そのテーブルの端に座っているのはこの国、フェザーリンク国の王である

アレクト・ユーゼント・フェザーリンク国王。そのとなり、右斜めに座るのはその妻である、クローディア・ムーンステイル・フェザーリンク王妃。

二人は食器の音の立てず、楽しそうに食事をしていた。

と、その時。大広間の扉がゆっくりと開いた。

「ああ、おはよう、イクト。スノーアクアも。」

「おはよう、二人とも。よく眠れたかしら？」

入ってきたのは一組の男女。この国の第二王子であるイクト・ロイアスキ・フェザーリンク王子とその半身であるスノーアクア・クリステル。

王と王妃の挨拶に対して、イクトは目礼だけをし、スノーアクアはそのよく通る声で答えた。

「おはようございます、王様、並びに王妃様。はい、昨夜は仕事が早く終わりましたので、十分な休息が取れました。」

「そう。さ、早くお座りなさい。」

二人の反応にも王と王妃は表情を変えすることもなく、そのまま四人は静かに食事をしていた。

食後。紅茶が出され、一息ついた頃。王が話を切り出した。

「イクト。スノーアクア。それで、仕事の方は順調かね？」

「はい、今のところは問題ありません。」

「そうか。・・・ところで、今日も城下に行くのかね？ああ、責めているわけではないよ、民のことを知るのはいいことだ。ただ、＜成人の儀＞についてそろそろ決めねばならぬだろう？予定を聞きたいだけだ。」

「・・・城下には、参ります。今日は遅くとも夕方には帰ってくる予定です。」

「分かった。それでは、儀式について決めるのはまた今度にしよう。さて、私はそろそろ職務にかからなくてはならない。皆に今日も幸あらんことを祈って。」

そして、朝食は終わりを告げた。

1話：王族の朝食（後書き）

誤字・脱字がありましたら、お知らせください。

2話：＜トパーズの光＞（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

2話：＜トパーズの光＞

「いらっしやい。・・・あら、ロキくんのスノウちゃん？久しぶりね。」

「ロキとスノウだって？ああ、ふたりとも久しぶり。何してたの？」

時刻は昼の少し手前。ロキとスノウと呼ばれた男女は＜トパーズの光＞という店に来ていた。

「お久しぶりです、ロウラさん、リアスさん。少し、仕事があります。・・・。」

スノウと呼ばれた女性が申し訳なさそうに言う。男性も眉をしかめていた。

それにたいして、ロウラと呼ばれた女性が笑顔で答える。

「ううん、来てくれて嬉しいわ。仕事なら仕方ないものね。なんだから言いつつ、バドエルが心配してて・・・。」

「そんなことないぞ、ロウラ。この二人は、何か問題を起こすわけ

でもない。それで、久しぶりだな、二人とも。何か食べてくか？」

ちょうどそのとき、店の置くから大柄な男が顔を出した。店主のバドエルだ。

「遠慮しないでいいんだぞ。さあ、座ってろ。すぐに持ってきてやる。」

「ちょ、ひどくないですか、バドエルさん。俺には何にもなしですか？」

「お前はただいるだけだろうが。仕方ない、ロキ、あいつと同じところでいいか？」

ロキが頷くのをみて、バドエルは店の奥に入っていった。それをリアスが面白そうに見る。

「愚痴い一つやさしいねえ、バドエルさんは。もちろん、ロキとスノウも。」

「でしょう？ 面倒見がいいのよね。」

「お子さんが出来たら絶対、かわいがるでしょうね。」

それに答えるようにロウラが笑った。その間、ロキとスノウはただやり取りを眺めていた。

しばらくして、手に大きなパイの皿を持ったバドエルが来た。それをテーブルにドンッと音をたてておく。パイはこの店の人気商品で、混み始めた店内のいたるところでおなじようなパイが置かれていた。しかし、周りにくらべてこのテーブルに置かれているパイがおおきいのは気のせいではないはずだ。

「さあ、食ってみろ。今回は大きめに作っておいた。」

「「いただきます。」」

パイの中身は煮込んだビーフシチューのようなものだった。牛肉が柔らかく、濃厚なスープは舌が蕩けるようだった。

「おいしい。」

「ほんとにおいしい。バドエルさん、また腕上げた？」

「まあな。いろいろ改良している。そんじゃ、ゆっくり食ってけよ。」

そういい残して、バドエルは店の奥に消えた。それを見送る三人。リアスが内緒話をするように言う。

「さすがは料理人って感じだね。・・・でも香辛料ってこのごろ値段が上がってるらしいけど、大丈夫かな？」

「そうなんですか？」

スノウが聞けば、リアスはああ、と納得したような顔をして続けた。

「知らない？だよね、此処最近起ってることだから、仕事してたら知らないよね。・・・なんでも、帝国から輸入してる香辛料は運搬で賊に狙われることが多いらしくて、この国に入ってくる量が少ないんだって。」

「賊が・・・」

「うん。だからバドエルさんも大変だよな。」

「そうですね・・・。」

「調べを開始しますか、イクト様。」

「ああ。明日からだな。」

「はい。では、王城に。」

2話：＜トパーズの光＞（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

よいお年を！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0518o/>

宝石の翼

2011年10月1日13時30分発行